

NEXT CONCERTS

▶▶ 次回東京定期演奏会

第 **779** 回

70周年シーズン開幕!  
マーラー編曲、歓喜の歌

指揮: **カーチュン・ウォン** [首席指揮者]

ソプラノ: **森谷 真理**

メゾソプラノ: **林 美智子**

テノール: **村上 公太**

バトン: **大西 宇宙**

合唱: **晋友会合唱団**

ベートーヴェン(マーラー編曲):  
交響曲第9番《合唱》 二短調 op.125

1回券料金 S ¥10,000 A ¥8,500 B ¥7,500 C ¥6,000 P 合唱団 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

サントリーホール

プレートク 船木 篤也氏

2026年 **4月10日(金)19:00**開演 18:30~

**4月11日(土)14:00**開演 13:20~

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁  
Agency for Cultural Affairs,  
Government of Japan



©TAKUMI JUN



©Toru Hiraiwa



©山口 敬



©Marco Borggreve

## 次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

カーチュン・ウォン 編  
きき手 池田 卓夫

「マーラーのレタッチ(補筆)」は日本フィルの未来を見据えた冒険です  
~2026年の創立70周年記念シーズン幕開けを担う首席指揮者カーチュン・ウォン

2026年は日本フィルハーモニー交響楽団の創立70周年に当たる。記念シーズンの幕開け、第779回定期演奏会を担うのは首席指揮者カーチュン・ウォン。曲目は季節外れ?のベートーヴェン「第九」(交響曲第9番)、しかもマーラーが管楽器を増強し、大編成の合唱を伴う補筆版というレア物。だ。真意はどこにあるのか?

——なぜ桜の季節にマーラー版「第九」を選んだのですか?

「日本フィルにとって、『第九』は最も演奏回数が多い楽曲でしょう。昨年12月だけでも10公演はありました。オーケストラにとっても観客にとっても、今や非常に良く知られた名曲ですが、初演(1824年)当時は交響曲に合唱を取り入れ、カン

タータやオペラに近い要素を持たせるなど、極めてラディカル(過激)な作品でした。日本フィルは古き良き伝統を重んじながらも、未来を見据えたオーケストラです。これまで私たちは第7、8、10番以外のマーラーの交響曲をともに演奏してきましたので、ベートーヴェンの『第九』にマーラー版を採用するのも、その自然な延長線上にある探求です」

——どのようなサウンドが鳴り響くのでしょうか。

「誤解のないように申し上げれば、これは再作曲や編曲ではなく、あくまでレタッチ(修正・補筆)です。1800年代後半から1900年代前半にかけてトスカニーニやワインガルトナー、さらにはカラヤンの時代に至るまで、指揮者がスコアに手を入れるのはごく自然な作業でした。マーラーは指揮者でもあり、ホルンを8本にするなど管楽器を倍増させ、ベートーヴェンの時代にはなかったチューバを加えています。もしベートーヴェンの存命中にチューバがあれば、きっと使っていたはず。マーラー版では合唱にも、かつてのカラヤン時代のような大人数を必要とします」

——世界のオーケストラ界ではモダン(現代)、ピリオド(作曲当時)の枠を超え、歴史的情報に基づく演奏(HIP)がデフォルト(標準動作)となりつつもあるのですが、あえてマーラー版を持ち込み、「第九」を見直すのは面白い視点ですね。

「HIPスタイルは今や世界中で確立され、私もドイツや英国で指揮する際にはヴィブラートを抑えたり、楽器を持ち替えさせたりしています。しかし日本フィルという、とても伝統的で(良い意味で)保守的な組織にあってはDNA(遺伝子)を無理に変える必要がないと考えるのです。ワーグナーやワインガルトナーらが100年以上前に振ったであろうやり方で、堂々とマーラー版を演奏する——それは私にとっても指揮者、作曲家としてのマーラーの思考プロセスをたどる、素晴らしい学びの機会となるはず」

——創立指揮者、渡邊暁雄さんのモダンなレパートリーと演奏を知る世代としては、ウォンさんが日本フィルに「伝統と保守」を感じることで自体が新鮮です。今後はどういった展開を目指しますか?

「私も日本フィルの誕生背景を学び、1950年代当時はnew kid on the block(期待の新人)だったと知りました。創立70周年の節目に『今日の交響楽団』である意味を問い直し、次の70年があるべきかを考える機会とするつもりです。夢はたくさんあります。1つは渡邊先生の『日本フィル・シリーズ』も踏まえて『日本フィル作曲家アカデミー』を設立、才能ある日本の若い世代の作曲家を助け、彼らの作品を積極的に演奏することです。すでにハレやクリーヴランドの管弦楽団では古典の芥川也寸志だけでなく、芥川也寸志サントリー作曲賞受賞者の桑原ゆう(筆者註:1984年生まれ)の作品も指揮しています。もう1つは日本フィルとロンドンのプロムス(BBCプロムナードコンサート)に乗り込み、マーラーを大真面目に演奏した後に全員が法被をはおり、外山雄三の『管弦楽のためのラプソディ』で大喝采を浴びることです」

——最後にすごい夢を聞いてしまいました。ありがとうございます。